

ふるさと財団「地域再生マネージャー」情報

1. 基本情報

組織名・所属		株式会社ホーホウ				
役職		代表取締役				
氏名		木藤 亮太	ふりがな	きとうりょうた	生年	1975年(昭和50年)
連絡先	住所		〒			
	固定電話				携帯電話	
	メールアドレス					

2. 経歴・取組内容、取組分野等

主な経歴・受賞歴	<p>宮崎県日南市が実施した全国公募で選ばれ、2013年7月より“猫さえ歩かない”と言われた油津商店街の再生事業に取組み、約4年で25を超える新規出店、企業誘致等を実現。商店街再生の好事例として国や各地から大きな評価を得ている。</p> <p>その後は自らのルーツがある福岡県那珂川市に拠点を移しJR博多南駅前ビル「ナカイチ」を地域コミュニティを育む場として再生(2018より)、39年の幕を閉じた老舗喫茶店「キャプテン」を継承(2019より)。</p> <p>大分県内のまちづくり人材を育成する「旅する学校／問いを立てる／漕ぎ出す学校おいた」校長(2021より)。 昨年は大分県豊後大野市「関係人口交流拠点施設cocomio」の指定管理をスタート(2022)。 JR古賀駅西口、JRの宇島駅前のエリアマネジメント事業を担い、拠点として古賀市JR古賀駅西口に「るるるる」、豊前市JR宇島駅前商店街に「ZigZag」オープン(2023)。 文化庁非常勤調査官(文化的景観分野)に就任(2022)。 移住業界最大のコント「九州移住ドラフト会議」コミッショナー(北部九州担当)を務める(2020～現在)。</p> <p>【受賞歴】 土木学会デザイン賞優秀賞(2008年・土木学会景観・デザイン委員会)※子守唄の里五木の村づくりとして受賞 はばたく商店街30選(2015年・経済産業省)※油津商店街として受賞 先進的まちづくり大賞都市みらい推進機構理事長賞(2019年度・国土交通省)※油津応援団として受賞 全国商店街DXアワード優秀賞(2021年・全国商店街DXアワード実行委員会)</p>
----------	--

取組内容・実績等	<p>わずか4年で29もの店舗づくりや企業誘致を実現したことで、シャッター街と化していた宮崎県日南市の油津商店街は劇的な変化を遂げた。その中心的存在を担う“テナントミックスサポートマネージャー”として評価を受けている。月額90万円という破格の委託料が話題となった公募で全国333人の中から選ばれ、油津商店街に家族揃って移住し、地元商店街の信頼を高めていった。</p> <p>2013年7月に着任し、仲間と共に「株式会社油津応援団」を設立。自らリスクを取って商売をする「民」の顔と、行政と協働する「公」の顔を持ちながら、「4年間で20店舗のテナント誘致」というミッションを達成した。商店街から徒歩5分の広島東洋カープキャンプ地と連携し、赤く塗ったカーブロード、カープ油津駅などを手掛け、キャンプ地としての賑わいづくりに成功するなど、地方創生時代の新しい商店街活性化のあり方、として全国から視察が相次ぐなど、高い評価を得ている。</p> <p>任期終了後は、地元でもある福岡県那珂川市に拠点を戻し、九州各地の新たなまちづくりを仕掛け続けている。試行錯誤の中からつかんだ「油津流」まちづくりが、また別の地方へと広がりを見せる。これら多くの地域活性化キャリアから見えてくる新しい「地方創生」のかたちについて、全国で講演を続けている。</p>
----------	--

取組分野(テーマ)	● 観光	(プロ野球キャンプと連携した賑わいづくり、文化的景観)
	移住・定住・関係人口	()
	● 農林水産業	()
	● 起業支援	(地方都市におけるIT関連企業の誘致)
	● まちなか再生	(商店街の活性化、リノベーションによる店舗づくり)
	集落再生	()
	環境	()
その他	()	

3. 関連ホームページ	
名称	アドレス
まちの「温度」を変えたい “地域活性化請負人、木藤亮太の新たな挑戦”	https://qualities.jp/article/kitou
福岡県那珂川市の楽しい玄関。多様な価値観が集まる「ナカイチ」。	https://sotokoto-online.jp/local/1062
惜しまれつつ閉店した「キャプテン」が、新たな“キャプテン”を迎え復活	https://relay.town/magazine/captain/
九州移住ドラフト会議	https://npb-jiu-draft.jp/
4. ふるさと財団での実績	
外部 専門家	活用 助成
外部 専門家 派遣	(短期 診断)
地域 再生	セミナー
	その他 ほか
5. 財団報告書	
名称	アドレス
6. 写真・ひとことPR	
	<p><ひとことPR></p> <p>これまでまちづくり、賑わいづくりは「人を多く集め、経済を育むこと」が大前提でした。自粛や非接触が求められる時代を迎え、私たち“専門家”は、大切にしてきた概念や手法を全てゼロから見直さなければいけなくなりました。しかし、厳しい状況の中でも、光を感じる“気づき”を多く得ました。本企画書にはその“気づき”をできる限り散りばめました。これらは令和時代を迎えたわが国、わがまちの未来を描く上で重要な視点です。本業務を3カ年かけて遂行していく中で、古賀市のあるべき未来の姿を皆さまと一緒に見つけ出していきたいと考えています。</p> <p>良かったところを知る世代にも、強さもあれば弱さもありません。「地方創生があたりまえ」の世代ももちろん。否定、肯定ではなく、それぞれがうまく融合していくこと。それぞれが次へ次へとつないでいく意識を持つこと。まさにリレー競技における日本のお家芸である「バトンパス」を意識することが、これからの「地方都市のまちづくり」において重要です。</p>